

---

# 赤と青の神話 二章

深江 碧

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤と青の神話 二章

### 【Nコード】

N3275Y

### 【作者名】

深江 碧

### 【あらすじ】

森の化け物を退治できなかった三人は、南の王の下に帰ってくる。そこでクロフは王に懇願する。自分に一年の猶予が欲しいと。その間に、腐った土地を開墾し、作物の実る土地にしてみせると。王は条件を飲み、クロフは数人の奴隷と共に土地を耕し始める。やっと二章です。もう正直、どこの文章から直せば良いのかわからないです。よって、そのままに近い形で載せています。読みにくいかもしれませんが、よろしくお願いします。

## 光と影

### 二章 光と影

城下町では三人の馬が遠くの荒野に見えると、民衆は三人の英雄が化け物を倒し、無事返ってきたと思いきんだ。

そしてその姿を一目見ようと門に詰めかけた。

そのため彼ら三人が城門に着く頃には、屋台や露店が軒を連ね、大通りに人があふれ、城下町はお祭り騒ぎだった。

南の国の民は森の化け物が退治された喜びに沸き、街は明るい雰囲気にも包まれていた。

フィエルナ姫は、城壁の前で未来の夫となる若者を不安と期待の入り交じった面持ちで出迎えた。

戸惑ったのは三人の方だった。

城壁の前で姫や街の人々に出迎えられ、どう応えていいのかわからなかった。

フィエルナ姫が安心したように、馬上のクロフを見上げ尋ねた。

「皆様が無事で何よりです。森の化け物はさぞ手強かったでしょう？ お怪我などされませんでしたか？」

クロフが困ったように頭をかき、馬から下りようかと迷っていると、ヒーネが馬から飛び降り、フィエルナ姫に駆け寄った。

「ええ、そうなのですよ、姫。わたしは二人を従え、あの恐ろしい森へと入っていったのです。しかし化け物めはわたしが来るのが前もってわかっていたのか、恐れをなして森中に罾を張り巡らせたのです」

フィエルナ姫は不安そうに胸の前で両手を組んだ。

ヒーネはその白い手を取って握りしめる。

「しかしわたしは勇敢に進み、数々の罾をかくぐり、数多の難題

を解決し、森の奥へと進んでいったのです。すべては姫と南の王様のため。わたしはそれだけを思い、戦い抜いたのです」

馬上のクロフはヒーネの話に聞き入っているフィエルナ姫や街の人々を見回し、隣の馬に乗っているケーデインを肘でつついた。

「今のうちに王の館に戻りましょう。あなたの目の怪我もありますし、領主様とも急遽相談したいことがあります」

クロフは城門の前の人々に気づかれないように、こっそりと馬を進め、城壁を回り込んだ。

城壁の石壁にそって歩き、クロフは裏門を目指す。

クロフは目が見えないながらも不機嫌な顔で後ろを付いてくるケーデインに話しかける。

「もしも、すべて本当に上手くいったら、この土地も元に戻り、あなたの目も治るかもしれません」

## 光と影 2

今まで口を引き結び黙り込んでいたケーデインはゆっくりと顔を上げる。

「本当か？」

馬の歩みに揺られるようにして、クロフは黙ったままごつごつした城壁の石垣を眺めている。

「すべて、上手くいったら、ですよ。もちろん、そんなに上手くいきつこないことくらい、ぼくにもわかっているんですけどね」

クロフはそれきり口を閉ざした。

城壁を渡る風が荒野の草花を揺らし、青空の彼方へと吸い込まれていった。

蒼むした日陰の道を通り、二人は鉄格子のはまった裏門にたどり着いた。

門の前には二人の衛兵が鎧甲を身につけ、槍を構えて立っている。クロフは衛兵にケーデインの怪我のことを話し、裏門を開けさせた。

門を通り、白い石柱の立つ中庭に出たところで、ケーデインは感心したようにつぶやく。

「あなたの口の上手さもなかなかのもんだな。あの貴族のぼっちゃんと引けを取らないくらいだ。まあ、あなたの方はぼろを出さないだろうがな」

ケーデインは手綱を握り直し、口元に笑みを浮かべる。

森から帰ってきて以来、初めて見せた和らいだ表情だった。

「嘘は付いていません。ただ必要なことしか口に出していないだけです」

クロフは苦笑いを返す。

白い石畳の敷き詰められた中庭を抜け、二人は城の入り口に馬を止める。

クロフは城の小姓と二言、三言言葉を交わし、馬の手綱を手渡した。

召使いに案内され、二人は城仕えの薬師の部屋に通された。通された先は薬草の匂いが立ちこめる、薄暗い部屋だった。

天井や部屋の壁には様々な色の植物がつるされ、赤い炎の揺らめく炉には大きな鉄鍋がかけられている。

薬師は白髪の痩せた老人だった。

二人の怪我を見るなり、棚から毒々しい薬の壺を取り出す。

二人とも打ち身や擦り傷だらけだったので、薬師の塗ってくれた塗り薬が傷に染みて危うく悲鳴上げそうになった。

薬師が目を見張ったのは、大蛇の毒液を受けたクロフの腕とケイデインの両目だった。

クロフの手首からひじまで、炎に巻かれたように赤く焼けただけ、ひどい水ぶくれを起こしていた。

「こんな大怪我で、お主、よく今まで平気じゃったのう」

薬師の話を聞いてケイデインは顔色を変える。

「おい、お前、そんな大怪我を、どうして今まで放っておいたんだ  
！」

ものすごい剣幕で怒鳴られ、クロフは笑いを返す。

### 光と影3

「手持ちの薬草は限られていましたし、あなたの両目の処置のほう  
が大事でしたから」

こともなげに言い放つ。

「だからつてな、お前！」

ケーデインはクロフに詰め寄ろうとしたが、白髪の薬師に止めら  
れる。

「怪我人同士が喧嘩するでない。そつちのひよろつこいのの怪我は、  
骨まで溶けていないのが不思議なくらいの重傷だし、筋がいくらか  
切れているから、多少の不便が出るかもしれぬな」

薬師は部屋の隅の清潔な白布を持ってきて、それを広げる。

「このでかいのはかなりの重傷だな。両目とも視力を失っており、  
わしの持っている薬草や、過去の文献からでは、こいつの両目を治  
すのは不可能じゃな」

わかつていたこととは言え、いざ目の前ではつきりと告げられ、  
ケーデインは肩を落とした。

治療が終わると、二人は老薬師に礼を言つてその部屋を後にした。  
長い城の石畳の廊下に二人分の靴音が響く。

城にはほとんど人の気配が無く、薄暗く静まりかえっていた。

窓の外の城下町の方からは、人々のにぎやかな声が風に乗って聞  
こえてくる。

「あの貴族のぼっちゃんはまだ城門のところにいるのか？ 森の化  
け物も退治していないのにいい気なもんだ」

ケーデインはクロフの肩を借り、ゆっくりと薄暗い廊下を歩いて  
いく。

「森の化け物について触れられたら、彼はどう答えるつもりなんで  
しょう？」

クロフは苦笑いを浮かべる。

「さあな。貴族どもの考えることは、いまいちよくわからん」

ケーディンはどうでもいいことばかりにはき捨てる。

クロフは廊下を進み、曲がり角を曲がる。

城内の召使いがほとんど出払っているため、領主の部屋までの道のりは、二人の記憶だけが頼りだった。

しかしクロフは立ち止まったり、長く迷ったりすることはなく、廊下を進んでいった。

「おい」

三つ目の曲がり角を曲がったところで、ケーディンが声をかける。

「お前、さっき言ったことは本当なんだろうな？」

クロフは足を止め、わずかに顔を上げる。

「城門の外で言ったことだよ。おれの目が上手くいけば治るとか、何とか。あれは本当なのか？」

クロフは一瞬だけためらうように、光の差し込む窓の外を眺める。

「ええ、そうです」

ケーディンの口から喜びの音が漏れる。

「やった、本当か？」

## 光と影 4

クロフはしばらくの間黙り込む。

「しかし、それはとても困難なことです。下手をすれば、あなたの両目は永久に治らず、ぼくも命を失うことになるかもしれません」

ケーディンは喜びの声を慌ててのどの奥に引込める。

その時、ケーディンの両目はすでに光を失っていたため、その時クロフがどんな表情をしているか、赤金色の瞳に絶望にも近い暗い炎を映しているのにも、もちろん気づかなかった。

「詳しくは言えませんが、それはとても長い時間がかかるかもしれません。それでもいいですか？」

ケーディンは少しの間考える素振りをしていたが、大きくうなずく。

「まあ、ちつとはおれもため込んでいるしな。故郷に帰って、妹や弟達とつつましく暮らせばしばらくは何とかなるだろう」

ケーディンは豪快に笑う。

ケーディンの明るい様子を見て、クロフの口元にも笑みがこぼれる。

それからしばらくの間、ケーディンのたわいない話が続いた。

両目が治ると聞いて、気分が高揚していたのだろう。

彼はもっぱら故郷に残してきた妹や弟達のことについて話した。

荒野のヒースが夏の太陽を受けて紫色に染まる頃、故郷に戻るといつも一番初めに蜜蜂達のうるさいくらいの羽音にでむかえられるという。

早くに両親を病で亡くし、長兄である彼が妹や弟達の面倒を一度に見てきた。

彼は家計を助けるため、村を出て様々な仕事をやってきた。

街から街に移動するうちに、生まれ持った体格の良さと腕っ節が認められ、地方の権力者の護衛などを務めるようになった。

森の化け物のうわさ話はその時に聞き、一山当てようとやってきたという。

クロフはケーデインの話に相槌を入れ、廊下を歩きながら聞いていた。

しかしその横顔に時折ひどくつらそうな表情が浮かんでいたのを、盲目のケーデインは気付かなかった。

領主の部屋の少し手前まで来ると、クロフはケーデインから腕を放す。

「では、ここでお別れです。あなたは最初に領主の部屋を訪ね、森での出来事や、化け物についてのことを事細かに話してください。そしてその化け物に――太刀浴びせたこと、その代償に両目の視力を失ったことを話してください。そうすればいくら薄情な相手であれ、人々の手前、いくらかの報奨金がもらえるはずですよ。あなたはそれを持って故郷に戻ってってください」

ケーデインが抗議の声を上げる。

「おい、それは違うだろ！ 化け物はお前が」

「いいんです」

## 光と影 5

クロフはゆっくりと首を横に振る。

「あなたがもらってください。故郷で暮らすためにも、お金は多い方がいいでしょう?」

クロフはケーデインの肩を叩き、その背を押す。

ケーデインは廊下の壁に片手を置き、ぎこちない足取りで歩いていく。

「ありがとな」

ケーデインは背を向けたまま、小声でつぶやく。

クロフは黙ったまま、その大きな背中が扉の向こうに消えるのを見つめていた。

「森の化け物を退治したところで、作物の実らなくなった土地は元に戻りません。それどころか、もっと悪い事態を招いてしまうかもしれません」

クロフは南の王と面会するなり、開口一番そう言った。

「では、どうすればいいのだ?」

王は椅子に座ったまま、額に手を当てる。

「無礼な頼みとは重々承知しておりますが、どうかわたしに幾人かの農夫と家畜、何種類かの穀物の種をください。彼らと共に土地を耕し、昔のような豊かな土地に戻して見せます」

王の部屋にいた家臣達が一斉に顔を見合わせる。

王は暗く重苦しい声で答える。

「しかし今までに何人もの農民がその土地で作物を育てようとしてきたが、無理だったのだぞ。お前のような農民でもない者が、作物を育てても失敗するのは目に見えている」

部屋の窓から差し込む昼の明るい光とは対照的に、人々の顔には

暗い影が落ちている。

「今までそうやって甘言を弄し、わしに近づいて来た者は何人もいたが、誰一人として土地を元に戻した者はおらぬ。それどころか、奴隷や家畜を持って逃げる者や、途中で行方知れずになる者ばかりだ。お前がそうならない保証はあるのか？」

クロフは何も言わなかった。

重苦しい沈黙の中、赤く燃える炉から薪のはぜる音が響く。

「わかった。数名の奴隷と、数頭の家畜、穀物の種を与えよう。しかし、ただでと言うわけにはいかぬ。何らかの物品と引き替えだ」

王はクロフの身なりをじろじろと眺め回した。

クロフの身なりはただでさえみすばらしいものだった。

森の化け物との戦いの折、服のあちこちは泥で汚れ、破れたままになっている。

「わたしの与えられるものは、たった一つしかございません」

クロフは強い意志のこもった赤金色の瞳で領主を見つめた。

「それは、わたしの命です」

## 光と影 6

王はそれを聞くなり、部屋中に響くほどの大声で笑い転げた。家臣達の間からも忍び笑いが漏れる。

「命？ 命と言ったか？ 言うに事欠いて命とはな。これは面白い」  
クロフは王の笑いが収まるまで目を伏せ、黙りこくっていた。  
「では一年だ。一年の猶予をお前にやろう。それまでに何の成果も現れなければ、お前の命とやらをもらおうとしよう。来年の春を楽しみにしているぞ」

王は傍らに控えていた召使いを呼び、クロフに数人の奴隷と家畜、穀物の種など、必要と思われる物をそろえさせた。

最後に出発するときになって、監視役として衛兵二人を伴わせた。  
「あの者が逃げぬよう、くれぐれも監視を怠るな」

クロフは一時の休息も取らず、追いつてられるように奴隷や家畜を連れて城を出発させられた。

太陽が西の荒野に差しかかる頃、うち捨てられた村に一行はたどり着いた。

森に化け物が住み、大地の腐敗がすぐそばまで迫ってきたため、村人が逃げ出し、人の住まなくなった村だった。

石壁の家々の扉は開け放たれ、水瓶には水が残り、冬用の薪や鉢に植えられた植物がそのまま置いてあった。

納屋には作業用の鍬や、家畜用のわら、大麦といった食料がそのまま残してあった。

クロフは村で一番の大きな家に奴隷達と一緒に泊まり、残っていた薪を燃やして暖を取った。

城でもらったいくらかの大麦のパンを炉の火であぶり、納屋に引き入れておいた家畜の乳をしばり、それらを暖めて夕食とした。

奴隷だからといって、クロフは彼らを区別することはしなかった。パンを均等に分け、五人の奴隷に平等に行き渡るようにした。

南の王に命じられ付いてきた衛兵二人は、部屋の隅で別々に食事を取っていた。

次の日の朝早く、村から少し離れたためかるんだ土地にたどり着いた。

元々畑や牧草地だった土地は、地の底から気泡が湧き、辺りには鼻をつくような悪臭が漂っている。

その土地には木らしいものは生えておらず、ぬかるんだ平野には葦が伸び、ごつごつした岩地がどこまでも続いていた。

クロフは奴隷をそこで一端休ませ、馬に乗って平野や丘の向こうを見に出かけた。

いくらか進むと、小高い緑の木立が眼前に広がっている。

そこが一带を沼地に変えたという大蛇が住む森だった。

クロフは緑の森から目を背け、沼地とそうでない土地との境目に馬を進めた。

馬を進めるうちに、沼地が森を中心にほぼ円形に広がっていることに気が付いた。

## 光と影 7

沼地を一巡りして戻ってきたクロフは、奴隷達と共に沼地を掘り返し始めた。

クロフには吟遊詩人になるため、神殿で教えられた様々な知識があった。

土や植物に関する知識もその一つだった。

クロフはその知識を生かし、土地を蘇らせようと考えた。

しかしそれが長い時間を必要とし、とても困難なであることは、クロフにもわかっていた。

クロフは土を調べ、どうすれば土地を蘇らせることが出来るのか、その土地で育てられる作物は何かを調べ始めた。

それから毎日、クロフは奴隷達と共に土を耕し、作物の種をまき、牛馬の世話をし、そこから肥料を作って畑にまいた。

夜明けと共に起き、日が暮れるまで働き、うち捨てられた村へ戻る生活が続いた。

領主に命じられてクロフの様子を見張っていた衛兵は、ある満月の夜にクロフが村から出て行くのに気が付いた。

クロフは足音を忍ばせて馬に乗り、森の方角へ向かっていく。

衛兵はお互いうなずき合って、クロフに気付かれないように後を追った。

クロフは森の端まで来ると、馬の手綱を木の枝に結び、松明を片手に森へと足を踏み入れた。

衛兵はしばしためらった後、後を追って月の光さえ届かぬ暗い森へと入っていった。

クロフは松明をかかげ、ぬかるんだ道を通り、森の中央にある湖へと向かう。

途中、生い茂った枝や、岩に足を取られつつも、クロフは湖にたどり着いた。

クロフが湖の岸边に到着するなり、月を映していた水面が波立ち、渦を巻き始めた。

渦の中から姿を現したのは、銀のうろこを月光にきらめかせた一匹の大蛇だった。

大蛇はクロフをちらと見、呆れたようにつぶやく。

「また懲りもせず来たのか。数日ごとにこの湖を訪れては、豎琴をつま弾き、世間話をしては帰って行く。お前はここへ何の理由があって訪れているのだ？」

大蛇は青い目を細め、松明の明かりに照らされたクロフの顔を見下ろす。

「別に特別の理由があつて訪れているわけではありません。あなたと話がしたいから来ているだけです」

クロフは岸边の岩の上に腰掛け、松明を岩との割れ目に立てかける。

「ぼくは土地を元に戻す方法を探しているんです。あなたなら、その方法をご存じかと思つて」

「それでわたしの機嫌取りか。ふん、いい身分だな」

大蛇は呆れたようにつぶやく。

クロフは背負つた豎琴を下ろし、音を確かめるように指で弦を軽く弾く。

そしておもむろに豎琴の音色に合わせ、歌い始めた。

クロフの歌声は夜風に乗り、辺りの森に響き渡る。

月の光が降り注ぐ湖面を揺らし、闇に溶ける木々の葉をざわめかせた。

## 光と影 8

豎琴の音は時として白々とした月の光のように澄み渡り、時として松明の炎のように明るく夜空を照らし出した。

クロフは一つの詩を歌い終わると、豎琴を背中に戻し、大蛇に頭を下げた。

「では今夜はこれで失礼します。月の神シンドウが夜の安らぎをもたらすように。また次の晩会いましょう」

クロフが湖から馬のところへ戻る途中、奇妙な声が木々の間から響いてくる。

耳を澄ますと、それは人の声のようだった。

クロフは声のする方に松明を掲げ、照らしてみると、衛兵二人が泥の中に腰まで沈んでいた。

三ヶ月が過ぎ、季節が夏に変わるまで森には何の変化も表れなかった。

クロフが耕した土地にはわずかな作物が実り、草木も少しずつ生えるようになっていた。

初夏を迎えたある日。ヒーネが兵士を引き連れて森の側までやってきた。

ヒーネは土を耕しているクロフを見つけると、馬の上から蔑むような目つきで見下ろした。

「君も大変だねえ。こんな土地を耕して何になるんだ？ 化け物を倒せば、すべては解決するのに。土地を耕すのは無駄な努力だよ」

ヒーネはクロフの耕した緑の畑を見ようとせせず、さつさと兵士を引き連れて行ってしまった。

クロフは言い返すことさえせず、また畑を耕しに戻った。それから数日後。

夜中に湖を訪れたクロフは、夜風に血の臭いが混じっているのに気が付いた。

クロフは何も言わず、豎琴で悲しげな曲をつま弾いて、彼らの鎮魂歌の代わりとした。

大蛇は青い目を細め、黙ってクロフの詩に耳を傾けていた。

季節は巡り、その度ごとに何組もの討伐隊が森へやってきた。

「化け物を倒しても、土地は元には戻りません。どうか討伐を考え直してはもらえませんか？」

クロフは彼らを説得しようと言葉をかけたが、誰一人としてクロフの言葉に耳を傾ける者はいなかった。

秋になり、クロフは畑で実った作物を収穫し、ささやかながら収穫祭を祝うことが出来た。

牛の丸焼きや、果物、蜂蜜酒は無かったが、奴隷達や衛兵も加わって、大きなかがり火を中心に歌や踊りをして楽しんだ。

この時ばかりは、クロフも皆の前で豎琴を弾きならし、明るい曲を演奏した。

祭りは明け方まで続き、そのにぎやかさは森にいる大蛇のところまで届き、彼女に呆れられるほどだった。

やがて長い冬が訪れ、再び明るい春が巡ってきた。

## 光と影 9

作物が育たないと言われた沼地は開墾され、草木が生い茂り、作物の種が芽吹いていた。

南の王に申しつけられた一年という期限は、目の前だった。

そんなある日。

クロフ達が耕している畑の前を、白い衣を着、馬に乗った神官達が通りかかった。

クロフはその先頭に行く若い神官に見覚えがあり、畑仕事の手を休めまじまじと見つめた。

かつてクロフと西の神殿で共に学んだ数少ない同年代の友達だった。

若い神官はクロフの姿に気付いたのか、一団から離れ、クロフのいる畑の真ん中までやってきた。

白い頭巾の下からのぞく鋭い瞳は氷のように冷たくクロフを見下ろしている。

「お前、こんなところで何をやっている。神殿を飛び出し吟遊詩人になった次は、農夫の真似事か？」

神官はどこどころで作物の新芽が芽吹いている畑を見回した。

「ロキウスこそ、こんな場所までやって来るなんて一体どういった用です？ この先には沼地と、森と丘しかありませんよ？」

「おれはその森に用があるんだ」

北からの冷たい風が二人の間を通り抜けた。

春先とはいえその風は雪のように冷たく、クロフの頬には刺すように感じられた。

「なぜ、森になんて用があるんです？」

クロフは心の動揺を表に出さないように努めた。

「お前がいつまでも化け物退治をせず、神殿に戻ってこないからだ。国民の窮状を救うのが神殿の務め。業を煮やした神殿はおれを派遣

し、一刻も早い問題の解決を望んだのだ」

ロキウスはクロフを鋭い目でにらむ。

「森の化け物を退治しても、問題は解決しません！」

クロフは声を張り上げる。

それはクロフが畑を通り過ぎる化け物退治の者達に何度となく話して聞かせたことだった。

ある者は一笑に付し、ある者は哀れみの目差しを向け、通り過ぎていった。

クロフはロキウスとの付き合いも長かったので、彼がクロフの言葉に耳を傾けないであろうこともよくわかっていた。

ロキウスはクロフの言葉を無視し、続ける。

「化け物の一件が片付いたら、お前には西の神殿に戻ってもらう。神殿では問題が山積している。いくら神殿を逃げ出したお前でも、役に立つことはいくらでもある」

クロフは黙ってロキウスの去っていく後ろ姿を見送った。

足元には、ロキウスの馬に踏みつぶされた作物の新芽が土に埋もれていた。

月が中天にかかる頃、クロフは皆が寝静まったのを見計らい、馬に乗って一人村を抜け出した。

クロフは通り慣れた道を進み、森の湖へ向かう。

いつもと違っていたのは、クロフが松明さえ持たず、無意識のうちには走っていたことだった。

茂みをかき分け、クロフは空の開けた湖にたどり着いた。

辺りに人の気配はなく、月の光を受けて湖は静まり返っていた。

クロフは安堵の息を吐き出し、おもむろに岸辺に近づいた。

空にはおぼろ月がかかり、黒い雲がたなびいている。

クロフが岸辺に近づくと、水面が盛り上がり銀の大蛇の姿を取った。

青い瞳がクロフの頭上から星のように見下ろしてくる。

「今夜はどうした？ 見たところ息も上がっているようだが。何かあったのか？」

「ええ、少し」

クロフは息を整えながら、近くの石に腰掛けた。

おぼろ月が黒い雲に隠れ、辺りは一瞬間に包まれる。

クロフの心の曇りは晴れず、どんどん不安が募るばかりだった。

「どうした？ やはり何か心にかかることがあるのだな？ もしわたしに話して楽になるのなら、話してみたらどうだ？」

予想外に大蛇に優しい言葉をかけられ、クロフは目を丸くした。

初めて大蛇と出会った時の対応を考えれば、雲泥の差だった。

それはこの一年の間、クロフがたびたび湖を訪れ、豎琴を弾き詩を詠い、話をしてきたためだった。

それが大蛇の心の氷を溶かし、安らぎをもたらしたのだ。

クロフは息を吐き出し、大蛇に事の次第をぼつりぼつりと語り始めた。

知り合いの神官が、明日にでもこの湖にやって来て、大蛇を殺そうとすること。

ぬかるんだ土地を奴隷達と共にこの一年間、耕し続けたこと。南の王に定められた期限がもうすぐやってくること。

クロフが話す間、大蛇は黙って聞いていた。

青い瞳は暗く沈み、何事か考えているようだった。

話し終えたクロフは岩の上から揺れる水面を眺めていた。

「それで、お前の真意はどこにあるのだ？ その知り合いの神官を、わたしに殺されたくないというのが、お前の本心か？」

クロフは答えなかった。

赤金色の目を細め、おぼろ月が水面に映っているのをぼんやりと眺めている。

不意に黒雲がおぼろ月を隠し、湖は再び闇に閉ざされた。

## 光と影 11

「保証は出来ない。しかし努力しよう」  
クロフは驚いて顔を上げる。

辺りが再び光りを取り戻したときには、大蛇の姿はどこにもなかった。

クロフは晴れない気持ちを抱えたまま、村に帰り着いた。  
床に潜り込んだクロフは、昼間の仕事の疲れのため、大蛇の言葉を深く考える余裕もなく眠りに落ちた。

それから二日が経ち、領主の定めた期日がやってきた。

南の王はお供の家臣とフィエルナ姫を引き連れ、馬に乗ってクロフの耕した土地を見に訪れた。

王はきれいに耕され、うねの出来た畑を見て感心した。

しかしそれは全体の沼地の半分にも満たないわずかな土地だけだった。

王はその時になり、クロフにほうびを与えるのが惜しくなった。

また無理な要求を与えれば、この若者は応えてくれるだろうと考えたのだ。

「確かにお前の言ったとおり、この土地は元に戻った。だがそれはほんのわずかだ。残り一年の間に、すべての土地を元に戻し、森の化け物も退治して、わしのところに来るがいい。その時こそ、姫もほうびも思いのままだ」

王は内心クロフを快く思っていなかった。

愛娘のフィエルナ姫が彼に好意を持っているのも、気に入らない理由の一つだった。

クロフは背後にいる奴隷達を振り返り、声を張り上げる。

「わたし達はこの一年の間、一生懸命働いてきました。すべての土

地ではないにしろ、沼地だった土地を元の豊かな土地に戻しました。わずかな報酬も休息も与えられないまま、わたし達に馬車馬のように働けと言うのですか？」

南の王はクロフの言葉に聞く耳を持たず、馬上から冷ややかな目で見下ろしている。

「お父様。彼らはお父様のために、ここまで土地を耕し、作物を植えてきたのですよ。心ばかりのほうびを与え、城でもてなしてやつてもいいではありませんか？」

フィエルナ姫が控えめに意見する。

王はフィエルナ姫の言葉に考えを改めたらしい。

「わかった。ならば今宵は城で宴を催そう。今夜ばかりは何もかも忘れ、貴賤の差も気にせず、宴を楽しむがいい」

王は馬を返し、クロフに背を向けた。

「では、クロフ様。今宵宴の席で会いましょう」

フィエルナ姫はクロフに会釈して、南の王の後に続く。

## 光と影 12

他の家臣達も馬を帰し、畑にはクロフと奴隷たちが残された。まだ畑の上を吹く風は冷たく、生えそろった新芽のあぜの間を音を立てて吹き抜けていった。

その晩、城に到着したクロフは、宴の場にロキウスの姿があるのに驚いた。

それは相手も同じだったらしく、ロキウスも目を丸くしてぼろぼろの服を着たクロフの姿を見つめている。

「このような席によくお前が顔を出せたものだ。化け物退治一つ満足にこなせないような、お前が」

「どうして」

クロフは白い衣をまとったロキウスをまじまじと見つめた。

ロキウスは冷ややかな笑みさえ口元に浮かべ、蜜酒を一息に飲み干した。

「どうして、とはな。おれがあのまま化け物にやられて、くたばるとでも思ったのか？」

「違う」

クロフは目の前が暗闇に覆われたような気がした。

ロキウスは手に持った杯を近くの給仕に差し出し、注いでもらう。

「彼女は、彼女はどうしたんだ？」

「彼女？」

ロキウスは片眉をつり上げ、不愉快そうに息を吐き出した。

「ああ、あの大蛇に化けていた女のことか。あの女だったら、神官達の炎に巻かれてもまだ息があつたのでな。神殿への報告のために、今はこの城の地下の牢屋に閉じこめてある」

クロフはそこまで聞くと、広間の扉へ向かって駆けだした。

「おい、待て！」

背後からロキウスの呼び止める声が聞こえる。

クロフは立ち止まらず、広間から飛び出した。

廊下を通り、階段を一足飛びに駆け下りる。

クロフは無我夢中で走り続け、気が付けば薄暗い地下牢にたどり着いていた。

松明の灯りがちらちらと揺れ、どこからか水の滴る音、罪人達のうめき声が木霊している。

クロフは牢番の兵士に頼み、大蛇に化けていたと言う女のいる牢屋を案内してもらった。

一番奥の頑丈な鉄格子の向こう、闇の中から青い瞳が射るようにこちらを見つめている。

「きみが、あの蛇なのか？」

松明の炎に照らし出された姿は、クロフが思った以上に小さく痛ましい姿をしていた。

年の頃ならクロフと同じくらい。

黒くぼさぼさな髪をした色白の娘だった。

「ならば、なんだと言っただ？」

娘は低い声で不機嫌に答える。

奴隷の身につけてつけているぼろをまとい、手足は枯れ枝のように細く、無数の擦り傷や切り傷がいたるところに見られる。

クロフが口を開くより前に、背後にいた牢番が口を挟む。

「まさか、森の化け物が、こんな小汚い娘だったとは思いませんでした。神官様に退治していただいて、これで一安心です。でも気をつけてくださいよ。下手に近づくと、この娘に呪いをかけられるかもしれません」

案内してきた牢番は身震いして、逃げ出すように立ち去った。

牢の前に取り残されたクロフは、食い入るように青い目の娘を見つめている。

「どうした？ わたしのこのような姿が、そんなに珍しいのか？」

娘は疲れたように息を吐き出した。

「いえ」

クロフは言いかけて口をつぐんだ。

放心しているような顔を見て、娘は忍び笑いをもらす。

「相手が人間だと思って、少し油断したらこの様だ。わたしを魂ごと滅ぼすことは出来なかったが、神官達の魔法の炎で散々な目にあつた」

疲れたような娘の表情には、どこか諦めの色があった。

もうこのまま自分がどうなってもいいという、深い絶望の気持ち。クロフは炎に照らし出された娘の横顔にその気配を感じ取った。

「あなたは、どうして大蛇の姿をしていたのですか？」

クロフはためらいながら尋ねる。

「どうして、とは？ あの大蛇の姿がわたしの本当の姿かもしれないぞ？ 今の姿は人間達を油断させるためにしている姿とは、考え

ないのか？」

「それは、考えませんでした」

クロフは照れくさそうに笑う。

それから娘から視線を外し、早口に話す。

「ええと、実はぼくは西の神殿に下された太陽の女神様の神託で、ここにたどり着いたのです。太陽の女神様の神託では、詳しいことまでは教えられなかったのですが、ぼくにはあなたが人の姿をしていると思ったのです。これはぼくのただの望みかも知れませんが、一度も会ったことのないあなたの姿を知っているというのは、変だと思いかも知れません。でもぼくは太陽の女神様を信じていましたし、神託には」

「待て」

娘はクロフの言葉を手で遮る。

「つまり、お前は太陽の女神の神託を頭から信じ、自分のことを知りたいがために、わたしを探していたというのだな？」

娘は青い瞳に怒りを宿し、声にも険しい響きが混じる。

「どいつもこいつも、自分のためか。人間とは愚かしいな」

クロフには娘がなぜ急に怒り出したのかわからなかった。

彼にとっては太陽の女神の神託が自分の信じる道であり、神殿の教えが彼のすべてだった。

「わたしがお前の正体を知っているというのは、嘘だ」

娘は氷のような一言を返す。

「お前は何か勘違いをしているようだ。わたしがお前の正体を知っている？ 太陽の女神の神託？ 今までそんな馬鹿みたいなことを信じ、ここまで来たというのか？ 本当におめでたい奴だな」

娘は口元に冷笑を浮かべ、クロフを嘲った。

「ならば教えてやる。お前は火の神クルスス。お前の役目とは本来は、わたしと対になるもの。火は水と相争うもの。お前が森の湖で剣を持ったとき、自分でない何かを感じなかったか？ それこそが本来のお前。天上の神々さえ忘れてしまった原初の火の神の姿だ。火の神は普段は人間の生活を助け、温もりと安らぎを与えるが、一度荒ぶれば、森を焼き、生き物の命を奪い、その熱と光ですべてを灰にする。現に、お前は湖でわたしを死の淵にまで追いやったではないか。それが天上の神々の意志であると、なぜわからない？」

湖で聞かされた言葉がクロフの胸に蘇る。

『神々の命で、わたしを殺しに来たのか！』

その時には痛まなかった胸が、娘の口から発せられるたびに鈍く痛む。

「違う！ 太陽の女神様の神託では、あなたを探し、助けよとのお告げで」

神託を否定されてしまったら、クロフを支えていたもの、信じていたものが、音を立てて崩れていってしまう。

光も差さない暗闇にクロフは放り出されるような気分だった。

「太陽の女神とて万能ではない。道を違え、神託を間違えることもあるだろう。ならば聞こう。お前は太陽の女神の神託を守り、お前の正体を知り、わたしを救ったところで、いったい何の得があると言うんだ？」

それはクロフが今まで目を背けていた部分だった。

「それは」

クロフは言葉に詰まる。

「答えられないだろう？ お前がそのつまらない神託を信じたせいで、わたしを殺して得られるはずの神々の榮譽も、地上で得られる名誉も、報奨も、姫の愛情も、お前はすべてを失ったのだぞ」

娘の一言一言にまるで呪いがかけられているかのように、クロフの心を傷つけ、切り裂いた。

クロフは黙って娘の顔を見つめていた。

ちらちらと松明の炎が揺れ、石畳には長い影が出来ている。

長く重苦しい沈黙が辺りを支配する。

「それで、もしあなたの言っていることが本当だとして、その後、あなたを殺した後、ぼくはどうすればいいのですか？」

クロフは震える声で尋ねる。

「さあな。自力で火の神として天上に戻るか、このまま地上に残って人間として生きるか、お前の好きにするがいい」

娘は素っ気なく答える。

クロフは口を開いたが、もはや何を言っているのかわからなかった。

おぼつかない足取りでクロフは壁にもたれかかりながら、階段の方へと歩いていく。

「吟遊詩人様、大丈夫ですか？」

クロフの青白い顔を見た牢番が心配して近寄ってきたが、クロフには彼の姿など見えていなかった。

ただ歩くだけで精一杯だった。

彼の目には何も映らず、彼の耳には誰の声も届かなかった。

どこをどう歩いたのか、気が付けばクロフは城壁の上に立っていた。

冷たい風が彼の赤い髪を揺らし、夜空には青白い月が妖しい光を投げかけている。

クロフは虚ろな目で夜空を振り仰いだ。

クロフの赤金色の瞳にわずかな生気が宿り、同時に底知れぬ闇が宿った。

「夜を支配する月の神シンドウよ。どうかぼくに安らぎを与えたまえ。平穏を与えたまえ」

かすれた声でささやくなり、クロフは城壁から暗闇へと落ち込んでいった。

鉄格子の隙間から差し込む松明の明かりに、デイリーアはうつすらと目を開けた。

城での祝宴は夜通し続き、人々のざわめきがデイリーアのいる地下牢まで響いてきた。

デイリーアは眠い目をこすり、ゆっくりと起きあがる。

地下牢には窓が無く、松明の明かりだけが唯一の光だった。

辺りは静まりかえっており、祝宴が終わったということだけはデイリーアにもわかった。

目が覚めてから水の滴る音、松明のはぜる音さ聞こえない。

牢番の兵士もどこかへ行っているらしく、囚人達も普段と違い息を潜めているようだった。

デイリーアの背筋を冷たいものが駆け上った。

両手を固く握りしめ、拳を額に押しつけた。

体はまだ震えていたが、かろうじて正気だけは保っていた。

天上での月の神とのやり取りが、彼女の脳裏をよぎる。

周囲の耳の痛いほどの静寂に、彼女は覚えがあった。

「月の神シンドウ」

デイリーアは体を両手で抱き、震えを止めようとする。

それは彼女が地上に生まれ落ちてから、森の化け物と呼ばれていた頃、何度となく遭遇した気配だった。

死に瀕した者に、月の神の使者が迎えに来るといふ話は、この国では一般的に信じられている話だった。

そのため、月の神は夜の安らぎをもたらすと同時に、死の恐怖を司る神でもあり、人々には畏敬の念で崇められていた。

デイリーアはこの城内のどこかに、死に瀕した者がいると考えた。その気配をもっと詳しく感じ取ろうと、頭を軽く振り、こめかみ指を当てる。

そのうちに耳が痛いほどの静寂は消え失せ、周りの音が戻ってきた。

ネズミの鳴き声、人の声に混じって、数人の靴音が近づいてくる。

松明の明かりがちらちらと揺れ、数人の影が牢の前に立つ。

デイリーアはこめかみから指を放し、じつと鉄格子の外を伺う。

松明に照らされたのは、森へ討伐に来たロキウスとみすばらしい身なりをした五人の奴隷達だった。

「お前が、今更わたしに何の用だ？」

ロキウスは牢の中のデイリーアを険しい目つきでにらみ付ける。

「そんな姿になっても、まだ一人前の口をきくか、化け物。お前の毒で何人の神殿の者達が傷ついたか、知らないわけではないだろう。本当なら今すぐにでもその首をはねてやるのだが、まあいい。今日はこの者達の頼みがあってここに来たまでだ」

ロキウスは後ろに連れてきた奴隷達を牢の前へうながした。  
五人の奴隷は年齢も様々で、年端もいかない子供から、腰の曲が  
った老人までいた。

五人に共通していることと言えば、皆がみすぼらしい服を着て、  
顔や髪、体が泥で汚れていることくらいだった。

「おれ達は、クロフ様のもとで働いていた者です」  
体格のいい男が牢の前に座り込む。

男は石の床の上に膝をつき、頭を低くする。

「どうかクロフ様の命を助けてください。どうかクロフ様の呪いを  
解いてやってください」

デイリーアは青い目を見開いた。

「クロフが、どうかしたのか？」

「はい、昨晚クロフ様は酒に酔った勢いか、城壁から足を滑らせて、大怪我を負ってしまったわけです」

腰の曲がった老人が答える。

昨夜のクロフとの問答がデイリーアの脳裏をよぎる。

「城の薬師も、みんなさじを投げてしまわれたのです」

若い男が引き継ぐ。

「だからクロフ様を助けてもらうために、こうしてあなたに頼みに来たのです。どうかクロフ様の命を助けてください」

ほっそりした女が牢の前に膝を付けて懇願する。

デイリーアは内心の動揺を抑え、黙り込んだ。

一番後ろに隠れていた奴隷の少年が、ゆっくりと鉄格子に近づいてくる。

「ねえ、お姉ちゃん。お姉ちゃんはクロフ様を助けてくれるの？」

あまりにも率直に尋ねられたので、デイリーアは一瞬だけ本心を取り繕うのを忘れてしまった。

「ああ」

小さくうなずいた。その途端、少年の丸い瞳が喜びに輝いた。

「本当ですか？」

「それならば、クロフ様の命は助かるのですね？」

奴隷達は口々に喜びの声を上げる。

ただ一人、石壁にもたれかかっていたロキウスだけは、鋭い目付きでデイリーアをにらんでいる。

「さっそく、クロフ様の寝室に案内しましょう。時は一刻を争うんです。神官様、早く牢の鍵を」

体格のいい男が石壁の側にいたロキウスを振り返る。

ロキウスは不機嫌そうに鼻を鳴らし、牢の前に歩いてきた。

「やはり、地下に住まう神々を崇める魔女だったか。生かすも殺す

も自由自在というわけだな」

ロキウスの小さなつぶやきを、デイリーアは聞き逃さなかった。白い衣から牢の鍵を取り出したロキウスを、デイリーアは真っ向からにらみつける。

「誰が、あいつの怪我を治すと言った」

ロキウスは鍵を開けようとしていた手を止め、牢屋の中のデイリーアを蔑むように見下ろす。

「あいつは、クロフは、城壁から足を滑らせたのではない。ましてや、わたしのかけた呪いなどであるものか。あいつは自分に、この世界に絶望して、自ら死を選んだのだ」

奴隷達の歓声も止み、辺りは再び静寂に包まれた。

「そんな男に、今更生きる価値などあるのか？ 命を取り留めたところで、生きる意志などあるのか？ それこそ時間と労力の無駄だ」

「貴様！」

ロキウスは手に持っていた杖で床を叩く。すると杖の先からは赤い炎が吹き出した。

デイリーアは炎を見据えたまま、鼻を鳴らす。

「所詮、神官でも力でものを言わせるか」

神官達の炎は森で何度となく浴びせられたため、そのときの憎しみが心に舞い戻ってくる。

「もう一度、この炎で全身を焼かれないか？」

「ふん、やれるものならやってみるがいい。ただし、頭の固い神官共が、クロフを救うことが出来るならな」

「何を！」

ロキウスは杖の先の炎を鉄格子の間から差し入れた。

燃えさかる炎が、デイリーアの顔を赤く染める。

「確かに、お前ならば今のわたしを殺せるかも知れない。だが、クロフのそばに月の神の使者が来ている。お前のような神殿の若僧に、月の神の使者を追い払うほどの力はあるまい」

「月の神の使者、だと？ 伝聞にある月の神の使者が、あいつのすぐ側に来ているというのか？ お前にはそれがわかるといえるのか？」

ロキウスの顔色が一変する。

「だったら何だというのだ？ 仮にわたしが地下の神々を崇める魔女であるのならば、それも当然ではないか。ああ、そう言えば。天上の神々の声を聞き、その使者の姿を見ることが出来るのは、最近では神殿の神官の中でもごくまれだと聞いたことがあったな。お前ほどの神官ならば、さぞかしはつきりとその姿が見えるのだろうか？」

ロキウスは鉄格子の間に差し入れた杖を引き、牢の鍵を懐へ戻す。「魔女の力など借りなくとも、あいつの命は我々の力で助けてみせ

る！」

歯ぎしりさえ聞こえてきそうな顔つきで、ロキウスはデイリアをにらみつける。

白い裾を振り乱し、靴を響かせロキウスは牢屋から遠ざかっていく。

二人のやり取りを眺めていた奴隷達は、ロキウスが去っていった先を眺め、顔を見合わせた。

「……だそうだ。あいつの命は、お優しい神官様方が助けてくれるそうだ」

石床に両手をついたままでいた男は、デイリアの顔を見上げた。ゆっくりと立ち上がり、ぼんやりした目差しで辺りを見回している。

「クロフ様は、助かるのか？」

体格のいい男は、同意を求めるようにつぶやく。

腰の曲がった老人がうなずく。

「よかった」

男は顔をくしゃくしゃにして腕を振り上げた。

奴隷達は皆口々に喜びの言葉を叫び、牢の前を階段へ向かって歩いていった。

「これでいい」

ディリーアは牢屋の石壁にもたれかかり、独り言のようにつぶやく。

すると一人残っていた奴隷の少年が、不思議そうに牢の中をのぞき込んでいる。

「何だ？ まだわたしに何か用があるのか？」

少年は何も答えず、じつとディリーアを見つめている。

「お姉ちゃんの青い目、とつてもきれいだね」

ディリーアは呆氣にとられた。

森に住むようになって、人にこのような言葉をかけられたことなど、たった一度しかない。ディリーアはそれを思い出し、胸が痛んだ。

「青くて、とつてもきれい。あのお兄ちゃんの赤い目も、同じくらいきれいだったよ」

少年の言葉を聞いているうちに、ディリーアの目に温かいものがあふれてきた。

「すまない」

ディリーアは鉄格子に手を伸ばす。

「すまない、わたしのせいだ。全部、わたしのせいなんだ」

少年は小首をかしげる。

「どうして、お姉ちゃんが謝るの？」

ディリーアの頬を涙が伝い、その口から嗚咽が漏れる。

「泣かないで。泣かないで、お姉ちゃん」

子供は戸惑いながら、鉄格子の隙間から小さな手を差し入れた。

奴隷達が牢を去ってから、どのくらい時が経っただろう。

デイリーアの頭の痛みは消えず、月の神の使者の気配も消えてはいなかった。

それはすなわち、クロフの状態も変化が無いと言ったことだった。

デイリーアは痛む頭を押さえ、冷たい石の床に寝ころんだ。

ふっと目を閉じると、静かな暗闇が落ちてくる。

このまま消えてしまえたらどんなにいいか、とデイリーアは考えた。

しかし静かな暗闇は、石の上に響く靴音にかき消され、長くは続かなかった。

デイリーアは物音に顔をしかめ、のろのろと起きあがった。

靴音を響かせ牢屋の前までやってきたのは、白い衣を着た中年の女神官だった。

女神官はデイリーアの牢の前で立ち止まり、鉄格子越しに見下ろした。

「どうか、クロフを救ってはくれないでしょうか？」

女神官は鉄格子に手をかけ、悲しげに目を細めた。

またか、とデイリーアはため息をついた。

「クロフの命を救えるのは、あなたしかいないのです。そのため  
見返りは十分にいたしましょう。だから」

女神官は石の床に膝をつき、真っ直ぐな目で見つめる。

「どうして、わたしが」

デイリーアは青く冷たい瞳で女神官をにらむ。

女神官はデイリーアの鉄格子の前から動こうとしない。

「それは、あなたが、太陽の女神の神託にある、水の女神であるか  
らです。これは神殿内でも、ごく一部の者しか知らないことです。  
火の神の生まれ変わりであるあの子クロフと、水の女神であるあな  
たは、共に手を携えて同じ道を歩く存在であると、太陽の女神様は  
おっしゃっているのです」

女神官は鉄格子の前に拳を差し出す。

その手には牢の鍵が握られている。

「もしもあなたが彼の命を救ってくれるのでしたら、この牢から出  
してさしあげます」

デイリーアは女神官の手に握られた鍵を黙って見つめている。

「わたしを牢から出して、素直にお前達の言うことを聞くと、本気  
で思っているのか？ お前が牢から出してくれた後、逃げ出すかも  
知れない、お前に斬りつけるかも知れない。そうとは考えないのか  
？」

女神官は辺りを見回した。

「たとえ、そうであったならば、あなたの立場がますます悪くなる  
でしょう。あなたは、自分の立場をこれ以上悪くするほど愚かでは  
ないはずですよ」

デイリーアは肩をすくめた。

「そもそも、なぜわたしがあいつを助けなければならぬ。お前達神官が助ければいいだろう？ それともお前達は人一人満足に助けられないというのか？」

女神官は牢の鍵を握っていた手を引つ込め、うつむく。

「わたし達にあの子を救ってやることは出来ないのです。わたし達があなただを救う方法を見つけれなかったのと同じように、あなたにしかあの子は救えないのです」

女神官は石の床にひざまずき、何度も何度も頭を下げた。

白い衣が汚れるのもかまわず、頭巾からのぞく長い金の髪を石の上には散らす。

「お願いです。どうかあの子を助けてあげてください。お願いします。お願いします」

デイリーアは女神官から目をそらし、長い息を吐き出した。

「どうして、あいつのためにそこまでする。仮にも天上の神々に仕える誇り高い神官だろうに」

デイリーアはこめかみに指を当て、痛む頭を押さえる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3275y/>

---

赤と青の神話 二章

2011年11月28日08時50分発行